

主 題：人となられたことば

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章14－18節

今朝、見ていきたいのは、ヨハネの福音書1章のみことばです。ここ数回にわたって私たちは、福音書全体につながっていく導入部分、プロローグにあたる1－18節の内容を学んできました。きょうは、最後の部分となる14－18節を中心に考えてみたいと思います。まずは振り返りも兼ねて、1節からお読みしますので、これまでに考えてきたことも思い返しなが、それぞれよくみことばに耳を傾けてください。

ヨハネ1：1－18

「1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。：2 この方は、初めに神とともにおられた。：3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。：4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。：5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。：6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。：7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。：8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。：9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。：10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。：11 この方はご自分のくににいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。：12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。：13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。：14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。：15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。：16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。：17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。：18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」

さて、今朝私たちが一緒に学んでいきたいことは、“ことば”であるイエス・キリストが人となってこの世に誕生されたこと、イエス・キリストの受肉のすばらしさについてです。きょうの内容に入っていく前に、自分自身のこととして考えてみてください。果たして、私たちはイエス様の誕生を心から喜んでいるのでしょうか？今から2000年前キリストが人としてこの世に来られたという事実は、今私たちのうちに絶えず賛美を生み出し続けているのでしょうか？確かに、私たちはイエス様が誕生されたことのすばらしさをクリスマスの時期になれば頻りに考えることがあります。当然これはクリスマス限定の話ではありません。むしろどんな時であろうとキリストがこの世に来られたということは、私たちに大きな感謝と礼拝の心を生み出すものです。

思い出してみてください。最初にイエス様の誕生の知らせを耳にした者たちは、どんな態度をとっていたでしょうか？例えば「きょうダビデの町で救い主がお生まれになりました。」と御使いから聞いた羊飼いたちは、何をしていましたか？彼らはその知らせを耳にするとすぐに救い主を探しに出て行って、そして、それが確かな事実であることを目の当たりにすると喜んで賛美していました。みことばの中にもこのように書かれています。「羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」と。例えば東方の博士たちはどうだったでしょうか？彼らも誕生されたと

いう救い主を目の当たりにした時、その前にへりくだって、喜びと礼拝をささげていました。これも同じようにみことばの中に書かれています。「その家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。……」と。羊飼いにしろ、博士にしろ、同じでした。イエス・キリストが人として来られたという事実、この出来事に心を留めた者たちは、だれであれそのすばらしさに心から感謝していました。彼らの心は喜びにあふれかえり、ただ喜びにあふれかえっていただけではなく、その方の前にへりくだって礼拝をささげようとしていました。

では、私たちはどうでしょうか？私や皆さん、ひとりひとりどんな時も変わらずにキリストの受肉というすばらしさを覚えているでしょうか？先週 1 週間を振り返った時に、イエス・キリストが人として来られたというすばらしさを一度でも心に留めたことがあるでしょうか？そして、そのすばらしさに心躍らせながら喜びにあふれていたでしょうか？それとも、毎年決められた時になれば考えて、そしてそれ以外は考えないといった、ただの知識や情報になっていないでしょうか？イエス・キリストが人として来られたという事実について、いま一度考えてみましょう。これから私たちが見ていく 1 : 14 - 18 では、特に私たちに最高の喜びをもたらしてくれるキリストの受肉に関する三つの事実が描かれています。ですからそれを順に見てみましょう。このみことばを通して、イエス様の誕生はすばらしい、私たちの心に喜びと感謝をもたらし、そして何よりも礼拝する心をもたらすということを私たちひとりひとりが改めて考える時になることを心から祈っています。では、さっそくイエス・キリストの受肉に関する最初の事実から考えてみましょう。

○最高の喜びをもたらす“受肉”に関する三つの事実

1. ことばは人となってくださった 14 節

私たちに最高の喜びをもたらしてくれる一つ目の事実は、“ことば”は人となってくださったということです。もう一度 14 節をよく見てください。このように始まっていました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と。ここで気づいたと思います。著者は自分自身の思いや願いを述べていたのではありません。一つの考え方を提案していたのでもありません。ヨハネは、ただシンプルにある事実を述べていました。“ことば”は人となられましたと。人となられましたとは、限りなく人間に近い人間のような存在になったのではありません。今から 2000 年前“ことば”である神の御子イエス・キリストは、確かに完全な人としてこの地上に来られたのです。イエス・キリストが人として来られたということは、歴史的な事実でした。

でも、勘違いしてはいけないことは、「イエス様が人となられたのです。」と私たちが言う時、これはイエス様が神様でなくなってしまったのでは決してないということです。イエス様は、すべての始まりから永遠に存在しておられ、神のひとり子であるお方です。天におられた時もそうですし、この地上に来られた時もそうです。神様としての性質を失ったことなど一瞬たりともありませんでした。その事はイエス様が歩まれていた地上での姿を振り返ってみればわかります。私たちはその歩みの中に、何度も何度もその証拠を見て取ることができます。例えば、ヨハネの福音書だけでも繰り返し言われていました。ヨハネ 10 : 24 でイエス様は、自分に敵対する者たちに対しても自分が神様であることを明らかにしていました。24 節で、イエス様に対してユダヤ人たちは、このように言っていたのです。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」と。それに対してイエス様はこのように最後答えていました。ヨハネの福音書 10 : 30 にこのように記されています。「わたしと父とは一つです。」と。このことばを聞いたユダヤ人たちは、イエス様のことばの意味をすぐ理解しました。だから次の瞬間に彼らはイエス様を石打ちにしようとして石を取り上げていました。どうしてそのようなことをしようとしたのでしょうか？怒りと憎しみに満ちていた彼らは、このようにその理由を述べています。ヨハネ 10 : 33 「ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」

と。敵たちはイエス様がご自分のことを神様であると言っていることに気づきました。イエス様は自分に敵対するような者たちの前でもご自分がまことの神様であることを繰り返し示し続けられました。

でもこれだけではありません。イエス様は敵に対してだけではなく、ご自分が愛していた弟子たちに対しても同じようにご自分が神様であることを明らかにされ続けています。例えば、14:9-10で、ご存じの方が多いと思いますけれども、ピリポがイエス様に「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と言っていたのです。それに対して、イエス様は9節からこのように述べていました。「:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」と。

間違いなくイエス様は、どんな時も変わる事のない神様でした。敵たちもそうです。弟子たちも同じです。彼らははっきりとイエス様が神様であるという事実を目の当たりにし続けていました。完全な神様であるイエス様が、ほんの一瞬でも神様でなくなってしまうことはありませんでした。そして、そのようなお方が人となられたということです。神様としての性質を失うことによってではなく、人としての性質を取ることによって、この方は完全な神様として、完全な人としてこの地上に来てくださったのです。

別のみことばもこんなふうにあります。コロサイ2:9「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」と。また、ピリピ2:6-7「:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。……」と記されています。この真理の姿に心を留めてみましょう。かつてこの地上を実際に歩まれていたイエス様、あのイエス様は今の私たちと同じ人となられたお方だったということです。罪はいっさい犯されませんでした。ただ私たちとすべての点において同じ人間になられたのです。イエス様は私たちと同じように、小さな赤ん坊として生まれました。そして成長し大人になりました。イエス様は私たちと同じように空腹や渇きを覚えて食事をとることもありました。イエス様は私たちと同じように疲れや弱さを覚えて休みを取ることもありましたし、悲しみや痛みを覚えて涙を流すこともありました。私たちと同じように誘惑を受け、私たちと同じように信頼した友に裏切られることもありました。また私たちと同じように両親や子どもを愛して、うれしさや喜びにあふれて賛美をささげることもありました。神の御子であるイエス様は、人であるとはどういうことなのかを単に知識として持っていたお方ではありません。単に知っただけではありません。この“ことば”であるお方は、実際に人としてこの世に来られ、人としてこの地上を歩まれたのです。人であるとはどういうことなのか、この方はよくわかっていました。すごいことだと思いませんか？完全な神様であるお方が完全な人となるために、どれほどご自身のことをへりくだらせたのでしょうか。この地上に来るために、この方はどれほど多くの犠牲を払ったのでしょうか。

改めてよく考えてみてください。ヨハネは私たちがこれまで見てきたように、福音書を始めるに当たって、最初から何について語っていましたか？ヨハネは、最初このように始めていたのです。ヨハネ1:1「初めに、ことばがあった。」と。“ことば”であるイエス・キリストが、いったいどれほど偉大なお方なのかということ、いったいどれほど力を持っておられるのかということ、どれほど栄光にあふれた神様であるのかということ強調し続けていました。“ことば”であるイエス様がすべての初めから存在し続けていたこと、そんな永遠の神様であるということをヨハネは語っていました。ヨハネはすべてのものから、無から有を造り出したそんなイエス様が創造主であること、すべてを支配しておられる主権者であることについても語っていました。“ことば”であるイエス様がいのちであり、まことの光であるとい

うこともヨハネは繰り返し明らかにし続けていたのです。そしてヨハネはそれほど偉大なお方を描いた後で言うのです。「このことばは人となってこの世に来られた。」と。イエス様は永遠の神様でした。

言い換えれば、この方は何も制限を受けることもない、時間にも捉われることのないお方でした。でも永遠の初めからおられた方が限られた時間と限られた場所にしかとどまることのできない者になりました。この世界のすべて小さなアリから巨大な星に至るまでありとあらゆるものを創造された造り主であられるお方が、両親の助けを必要とするような無力な赤ん坊として生まれました。すべての主の主、王の王であられる、すべてを支配されている主権者であるそのお方が、ご自分が造った者のしもべとなられ、そしていのちの源であるお方が、いのちをほかの人に与えることができる唯一の権威を持っているそのお方が、あざけられ、苦しめられ、そして最後には十字架にかかって、そしてご自身のいのちを捨てられたのです。

完全な神様である方は完全な人となりました。私たちがこの主の姿を覚える時に、この方はいったいどれほど測り知れない犠牲を払ったのでしょうかと思いませんか？私たちと同じ人になるために、この方はどれほどへりくだったのでしょうか。忘れてはいけません。完全な神様であるイエス様は、このようなことをする義務はまったくありませんでした。でも、“ことば”であるこのお方は、私たちのように罪人に対する大きな愛のゆえに、人となってこの世に来てくださったのです。どんなに大きな愛でしょう。完全な神様である神の御子は、みずから進んで完全な人となってくださったのです。

そしてこの事実を覚える時に、私たちのうちにこの方の前にへりくだらないといけないう謙遜の思いが湧き出てきませんか？私たちのうちにこの方に対する感謝があふれてきませんか？この方に対する大きな喜びが湧き出てきませんか？ひとりの神学者スティーブン・チャーノックがこんなことばを残していました。「果てしなくかけ離れている二つの性質が、この世の何よりも密接に結びついているとはなんと驚くべきことでしょう…同じ人物が、栄光と悲痛の両方を持ち、神において無限の喜びを持ちながら、人において言い表せない悲しみを抱いておられるとは！王座にあられる神が揺りかごの中の幼子となり、雷鳴を轟かせる創造主が泣き叫ぶ赤ん坊となり、また苦しむ人となられるとは！受肉は地上の人々、天の天使たちをも驚愕させるものなのです。」と。完全な神様である方が完全な人として来てくださったという事実は、私たちが驚嘆するしかないものでした。

でも、ここが最高地点ではありません。さらに大きな喜びをもたらす事実が、ヨハネの福音書に記されていました。もう一度1：14に戻っていただくと、このように書かれていました。「ことばは人となって」その後、「私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。……」と。人となられた栄光にあふれたその“ことば”は、手の届かないようなどこか遠く離れてしまっているような存在ではありませんでした。この方は、「私たちの間に住まわれた」方だったので。

ここで注目してほしいのは、この「住まわれた」ということばです。このことばにはもともと「居住する」とか「テントに住む」という意味が含まれていて、特に「天幕とか幕屋に住む」という意味で使われていました。つまり“ことば”は人となって、私たちの間で天幕に住まわれたということです。幕屋に住まわれたということです。思い返してみてください。旧約の時代において、かつてのイスラエルにあって、天幕や幕屋とはどのような役割を果たしていたものだったのでしょうか？何のために存在していたのでしょうか？神様ご自身が民に向かってこんなふうに語っている場面がありました。出エジプト記25：8-9「：8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。：9 幕屋の型と幕屋のすべての用具の型とを、わたしがあなたに示すのと全く同じように作らなければならない。」と記されています。幕屋とは神様が臨在される場所でした。神様がおられる場所でした。幕屋とは神様の栄光が大いに現される聖なる場所でした。そして、幕屋を通して神様はイスラエルの民の間に生まれ、そして民たちは幕屋を通して神様に礼拝をささげたり、神様とともに歩んだり、神様と親密な関係や交わりを持っていたのです。

そしてこの幕屋の姿を引き合いに出して、ヨハネは1：14で「人となられたイエス・キリスト、この方こそ私たちの間に天幕を張られたお方なのだ。」と書いていました。そして「この方こそ神様の栄光の現れ、私たちとともにいてくださる神様なのだ。」と。感謝なことにイエス様は私たちと関係を持たないはるか遠く離れてしまっているようなそんな存在ではなかったということです。この方は私たちとともにいるために、来てくださった人となられた神様でした。そしてこの方は完全な人となってくくださったからこそ、同じ人である私たちの苦しみや痛みも、すべてのものを正しく知ってくださっているのです。ヘブル2：17-18にこのようなことばが記されています。「：17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。：18 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。」と。ヘブル4：15に「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と記されています。

もしかしたら私たちはいろいろな困難に直面するに当たって、今自分が経験している苦痛や悲しみをだれもわかってくれないと思ってしまうかもしれません。でもそんな場面に置かれる時、私たちはみことばから、私たちとともにいてくださる人となられた神様、イエス様は、そのすべてを知ってくださるということです。この方は、私たちの弱さも苦しみもご存じです。そして、私たちに対してあわれみを示し、苦しみにある者を助け出すことのできる圧倒的な力をこの方は持つておられるということです。そして、これが完全な神様であり、完全な人となられた“ことば”であるイエス・キリストでした。いったいどれほどすばらしいお方がこの地上に来てくださったのでしょうか。この事実は、私たちの心に最高の喜びをもたらしませんか？

2. ことばは恵みとまことを実現してくださった 15-17節

二つ目の最高の喜びをもたらしてくれる事実は、ことばは「恵みとまこと」を実現してくださったということです。人となられたイエス・キリストは、「恵みとまこと」を明らかにしてくださったお方でした。ヨハネ1：14の最後からこのように記されています。「：14……この方は恵みとまことに満ちておられた。：15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。」：16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。：17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」と。これを読んでいて気づきましたか？ヨハネは、ここで「恵みとまこと」という二つのことばを二度にわたって繰り返していました。人として来られたイエス・キリストのうちには、「恵みとまこと」が満ちているのだと強調していたのです。これだけを聞いても余りピンと来ないかもしれません。しかしこのことばは、非常に重要な事実を私たちに教えてくれていました。

それを正しく理解するために、旧約の出エジプト記33章を見てみるとこんな出来事が記されています。出エジプト記33：18-19「：18 すると、モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」：19 主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、【主】の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」と。まずこの場面を覚えていますか？この時のモーセは、間違いなく神様に対して自分が何を言っているのか、何を頼んでいるのか全くわかっていませんでした。それでも彼は、「神様の栄光を見せてください」と大胆に願ったのです。この願いに対して神様はどのように答えていたでしょう？続きにこのように記されていました。出エジプト記34：6-7「：6 【主】は彼の前を通り過るとき、宣言された。【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、：7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」と。どこかで聞いたことばが、出てきま

せんでしたか？「【主】、【主】」は、まさに「恵みとまこと」に富んでおられるお方でした。「恵みとまこと」は、神様のご性質そのものだったのです。

そして、この場面を引き合いに出してヨハネは、人となられたイエス・キリスト、この方こそ神様の栄光の完全な現れだったと。「恵みとまこと」に満ちておられる神様なのだと言っているのです。改めて考えてみてください。イエス様のうちに恵みが満ちあふれていました。私たちが聖書を見る時、罪の中に死に、神様に逆らい御怒りの子として歩んでいた罪人が救われるのに必要なものは何と言っていましたか？それはただ恵みでした。エペソ2：8にもこのように書いています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」と。私たちの努力でも良い行いでもありません。本来なら神様の御怒りに値した私たちに、絶対に値しなかった罪の赦し、永遠のいのち、神の子どもとされる特権が与えられました。どのようにかと言うと、ただ恵みによってでした。ただ恵みの力によってそれが成し遂げられたのです。救いは、すべて恵みのみわざでした。

でも救いだけではありません。救われた後の歩みにおいても私たちに必要なのは何でしたか？救われた後も必要なものは、ただ恵みでした。パウロはそのことをよくわかっています。2コリント12：9－10「：9しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。：10ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と記されています。パウロはわかっていました。彼自身の能力や才能ではありません。知恵や力強さによって信仰生活を送っていくのではありません。では何によってかと言うと、ただ恵みによってでした。ただ罪に汚れた自分を新しく造り変えることのできた圧倒的な恵みの力によって、歩みがなされていくのです。救いにおいても、信仰生活の歩みにおいても、私たちに恵みは欠かすことができないものでした。私たちに必要不可欠なものだったのです。

では、このすばらしい恵みを私たちはいったいいつもどこに見出すことができるのでしょうか？その答えは人として来られたイエス・キリストのうちでした。私たちに必要な恵みは、イエス・キリストのうちにありました。そこに恵みは豊かにあふれていたのです。あのマルティン・ルターもこのようなことばを残しています。「この泉は尽きることがなく、神からの恵みと真理に満ちています。私たちがどれだけ汲んでも、決して尽きることなく、全ての恵みと真理の無限の泉として常に溢れています。汲めば汲むほど、永遠の命に至る水が豊かに与えられるのです。太陽が世界中の人々にその光を享受されても暗くはならず、実際には十の世界を照らすことができるように、私たちの主であるキリストは、全ての恵みの無限の源です。たとえ全世界がそれから十分な恵みと真理を汲み取り、世界中が聖徒に満たされるほどになったとしても、その泉は一滴も失われることなく、常に溢れ、恵みに満ちているのです。」と。イエス様こそ恵みに満ちた、恵みにあふれているお方でした。そしてそんなお方であるからこそ「恵みの上にさらに恵み」を、「恵みの上にさらに恵み」を、「恵みの上にさらに恵み」を与えることのできるお方だったのです。もしかしたら私たちは、頭の中で自分にとって恵みが足りないとか、自分にとって恵みが不十分であると考えている時があるかもしれません。私たちが過去を振り返って見た時、私たちが自分自身の余りの罪深さや汚さを目の当たりにするその時、過去だけではなく今の歩みを振り返って見る時、私たちが余りにもひどい困難や難しい試練に直面する時、私たちはどこかこれは神様の手には負えないと、この状況の中では、恵みの力は不十分だと思うことがあるかもしれません。しかし、そんな場面に置かれる時こそ私たちはみことばから覚えることができます。恵みに満ちあふれておられるイエス様は、弱さのうちに完全に現れる恵みの力をあふれんばかりに与え続けてくださるお方だということです。

ポイントは、私たちの弱さのうちに恵みの力が働くということです。自分自身の力に頼って、時には高慢になるその中において、「神様は恵みの力を与えてくれません」と私たちは不平不満を言っている時も

あるかもしれません。だが、気づかないといけません。私たちのうちに働く恵みの力は、私たちが弱い時に働くものでした。恵みにあふれているイエス・キリスト、この方は私たちの罪深さもすでにご存じです。私たちは自分で自分のことをうまく隠していると思っていたとしても、この方はもうすでに私たちそれぞれの心の奥底の愚かさや汚さもすべてご存じです。この方の前に隠しおおせるものは何一つとしてありません。それでもなお、すべてに十分な恵みを豊かに与える力をこの方は持っておられるということです。

そして、この方に私たちは恵みを求めることができます。恵み深い方に、信頼してただ安心して身をゆだねることができます。恵み深く、恵みにあふれている方が、かつてこんなことを人々に言われていました。マタイ 11 : 28 - 30 「:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」と。イエス様は、重荷を持っている人は重荷を置いてから私のところに来なさいとは言われていませんでした。重荷を持っている者は、その重荷を持ったままおいでと。恵みの上にさらに恵みを与えることのできる恵み深いお方は、私たちのような罪人さえ招いてくださいました。そして私たちはこの方の恵みによって救われ、恵みの力を通して日々を歩いていくことができるのです。すばらしいことだと思いませんか？

かつて、あるひとりの青年もこの恵みのすばらしさを知って変えられました。どのような人物だったかという、この人物はクリスチャンの家庭に生まれて、福音の真理を聞いて育ちました。しかし、残念ながらいろいろな困難に直面した彼は、次第に神様から遠く、遠く離れていくようになります。そしてその後、英国の海軍に入隊することになるのです。しかし海軍での生活は荒れたものでした。次々に問題を起こした彼は、鞭打ちの刑にも何度も遭いました。そして、それに嫌気がさした彼はついには海軍も逃走し、アフリカへ行き、ポルトガルの奴隷商人と一緒に財を築くことになります。奴隷商人たちと行動をともにするようになった彼はある時、その船の操縦士になりました。しかし、ひどく墮落した生活を送っていた彼は、船のウイスキーを盗んで泥酔し、船から落ちたこともありました。溺れかけていたところを同乗者のひとりが鋸で突いて船へ引き戻しましたが、結果として彼の脇腹には傷跡が一生残ることになりました。彼の人生はこの時真つ暗でした。しかしそんな彼の乗った船が、ある日嵐によって沈没の危機に瀕することになります。その時、彼は幼い時に耳にしていたみことばに思いを巡らし、そして熱心に神様に助けを祈り求めました。そして心から感謝なことに、彼はイエス・キリストを信じることになるのです。後にこの人物は牧師にもなりました。これは、いったいだれのことか気づいた人はいますか？この人は、ジョン・ニュートンでした。そして、この人を知らないという人も、この人物が後につづった曲は、よくご存じでしょう。それが、「驚くばかりの」という賛美歌だったのです。その「驚くばかりの」の中で彼はこう歌っています。「驚くべき恵み その響きはなんと素晴らしいことでしょう 私のような邪悪な者さえ救ってくださいました 私はかつて失われていました でも今は見出されました かつては盲目でした でも今は見ることもできるのです」と。

神様の恵みは人を変える力がありません。神様の恵みは、到底測り知ることのできないすばらしいものでした。そして、その恵みがどこに現れていたかと言うと、イエス・キリストのうちに現れていたということです。この地上に来てくださったイエス様は、ただ恵み深いお方でした。それに加えてこの方はまことに満ちたお方でもありました。イエス様ご自身もはっきりとこう言われています。ヨハネ 14 : 6 「:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と。父のみもとへと繋がっているその道は一つしかありませんでした。その真理は一つしかありませんでした。ほかにさまざまな真理があったのではありません。イエス様だけがいつも正しい真理でした。イエス様だけを通して父のみもとに行くことができるのです。

そして“まこと”に関してこれから先、福音書を通して皆さんと深く学んでいきたいと思いますが、一つだけきょう覚えておいてください。この“まこと”と訳されていることばは、単に何か正しいという意味のほか「信頼できる」とか「誠実で頼りになる」という意味が含まれています。つまり言い換えれば、人として来てくださったイエス・キリストは、私たちがどんな時でも信頼することができる方ということです。“まこと”に満ちあふれておられるそのお方は、どんな時も変わらないからこそ安心して私たちが身を委ねることができるお方だということです。それが人として来られたイエス・キリストでした。恵みとまことに満ちあふれているお方、それが“ことば”であるイエス・キリストでした。いったいどのようなお方が来てくださったのでしょうか？この事実を覚える時、私たちの心に最高の喜びをもたらしませんか？

3. ことばは父を解き明かしてくださった 18節

三つ目の最高の喜びをもたらしてくれる事実は、人となられたイエス・キリストは、この地上にあって父なる神様を明らかにしてくださったお方だということでした。ヨハネ1：18のところをよく見てください。このようにまとめられていました。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」と。ヨハネが言っていたことは、まさにそのとおりでした。旧約聖書を通して一貫して教えられ続けてきたことでした。それは、人は神様を直接見ることはできないということでした。罪に汚れた罪深い人間が、聖なる神様を見るということは、文字どおりその人に死をもたらすものだったのです。きょう私たちが途中で触れた神様とモーセとのやり取りが描かれていた出エジプト記33章のところでもこのようなことばが記されていました。出エジプト33：20に「また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」と記されています。

いまだかつて神様を見た者はひとりとしていませんでした。しかしあるお方が、父なる神様がどのようなお方なのかということを知りたくするためにこの地上に来られました。単なる人ではありません。永遠の初めから父とともにいた、いつもともにいたひとり子の神が父とはいったいどんな存在なのかということを知りたくするためにこの地上においてはっきりと示されたのです。すごいと思いませんか？私たちが人として来られたイエス・キリストを見る時、私たちはそこに完全な父の姿をも見て取ることができるのです。イエス様は繰り返し、繰り返し言われていました。私と父とは一つですと。私たちが父の恵みとまことがどのようなものなのかを知りたいと願うのであれば、私たちが父の永遠に変わらないご計画がどのようなものなのかを知りたいとそう願うのであれば、私たちは御子を通してそれを知ることができます。こうして父を明らかにするために来てくださったイエス様は、ただことばだけで父はこんな人ですよとあかししたわけではありません。イエス様は人となって、そして実際に痛みや苦しみを受け、そして最後には十字架にかかることを通して、罪人に救いをもたらそうとする父なる神様の愛、柔和さ、赦しを明らかに示されたのです。それが人として来てくださったイエス・キリストの姿でした。このすばらしい姿を覚える時に、この事実を覚える時に、私たちの心に最高の喜びが生まれ出てこないでしょうか？

今から2000年前イエス・キリストがひとりの赤ん坊として、飼い葉おけに寝かされたという事実、これは私たちの理解が及ばない偉大な神様のみわざでした。完全な神様であるその“ことば”が完全な人となられ、恵みとまことを実現し、そして父を解き明かしてくださったそのお方が永遠の初めからおられた“ことば”、イエス・キリストでした。これから私たちはこの1-18節の導入部分を見た後で、実際の内容に入っていきます。イエス様がどのようなお方なのかということも、イエス様がどのようにして父を明らかにされようとしていたのかということも、そのすべてを私たちは詳しく見ていきます。でも絶対に忘れてはいけません。永遠の初めからおられたその完全な神様が、ある時この地上に完全な人として来られたのです。この真理は当たり前のものであり得るものではありません。私たちの中で廃れさせるようなものでもありません。私たちがいつも心から喜び、私たちがいつもこの方に感謝をし、

そして私たちがいつもこの方の前にへりくだって、礼拝するために十分過ぎる理由です。ですからぜひとも、いかにすばらしいお方が人として来てくださったのかということの日々覚え続けていきましょう。そしてこの方に感謝をささげる者として、この方の栄光を現す者としてともに歩んでいきましょう。